

標 題	平成29年産「つや姫」 夏期の高温に耐え、優位性を大きく発揮
-----	--------------------------------

(ダイジェスト)

本年産「つや姫」は、夏期の厳しい気象条件の中、一定の収量、品質を確保し、その優位性を大きく発揮しました。この結果から見えるのは、生産者における基本技術の定着、これまでの取り組みの成果です。

「つや姫」は、品質の低迷する「コシヒカリ」の代替品種として、平坦地を中心に作付けされ、6作目となった本年、その面積が約1,100haまで拡大しました。

本年の気象は、特に幼穂形成期から登熟期間にかけて高温傾向で経過し、厳しいものとなりましたが、平坦地において、一定の収量とともに平年並みの一等米比率を確保しました。その結果、「つや姫」は、粗収益において「コシヒカリ」を上回り、その優位性を大きく発揮した一年となりました。

また、「つや姫」マイスター（県が認定する各地域での先導的な生産者）実証ほでは、1.9mmふるい目に対応する大粒化を目的に新技術を検証しましたが、歩留率（収量1.9mm/同1.85mm）は目標値に近い平均96.8%となり、概ね平年並みの収量でした。なお、品質も同様でした。

こうした結果は、マイスターはもとより各地域の生産者において、当普及部で作成した「栽培の手引き」に基づいた栽培管理が実践され、稲体が健全に生育するとともに、葉色や茎数等が適正にコントロールされたことが大きな要因です。

当普及部では、マイスターに対して、実証ほの栽培指導や栽培管理情報の発信（5回/年）の他、研修（3回/年）を行いました。これに加え、各農業普及部では、実証ほでの栽培指導会や、地域独自の情報誌等により栽培技術を普及されました。「つや姫」の生産が安定しているのは、品種のポテンシャルとともに、この様な連携した取り組みの成果と言えます。

一方で、地域ごとの状況を細かくみると、品質の低迷や新たな調査を要する被害粒が発生している地域があります。また、猛暑、酷暑といった登熟期間の高温対策として補完的な技術の確立や普及も必要であり、今後は、こうした課題への取り組みを強化し、更なる安定生産とともに作付推進を図ります。

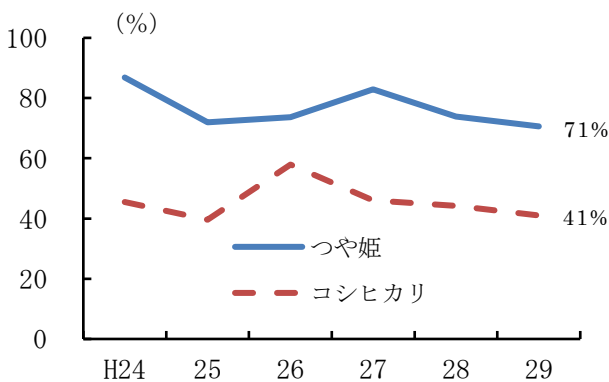


図1 1等米比率（東部平坦地）の推移

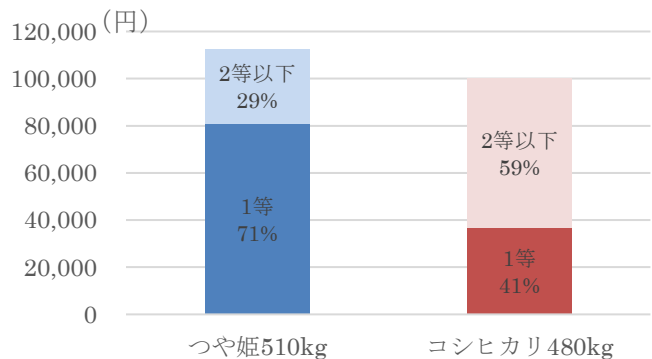


図2 粗収益/10aの比較

※H24～28年は同年度3/末現在。H29年は12/11現在  
東部平坦地は、JAしまねの、くにびき、やすぎ、い  
ずも、斐川各地区本部管内

※JA買取単価を参考にして試算。「つや姫」の場合、収  
量510kgの内、1等71%、2等以下29%で試算